

○藤本この美* 草野篤子**

(*信州大・院、**信州大)

目的 1999年9月、我が国でも経口避妊薬「低用量ピル」が解禁となった。ピルは、これまで日本で多く行われてきた男性主導型の避妊から、女性が自分の意思で避妊することを可能にするものとして期待されているものである。そこで、本研究ではピルに対する意識を調査し、さらに基本属性や避妊の実行状況との関連を明らかにすることによって、今後女性が「リプロダクティブ・ヘルス」を実現するのに必要なものは何か検討する。

方法 長野市内の保育園に子どもを通わせている保護者を対象とした質問紙による配票調査を行い、ピルに対して自分が抱えているイメージと自分自身の避妊法としてピルを使用することに対する考えの二つの側面から、性別ごとの分析と全体での分析を行った。分析にはSPSS統計パッケージを用いた。

結果 基本属性との関連では、性別・年齢・学歴との間に有意差が見られた。また女性では、ピルに対するイメージと現在の避妊法の信頼性との間に強い有意差 ($p < 0.001$) が見られ、現在行っている避妊法に不安を感じている人はピルに対して肯定的なイメージを持っていることがわかった。さらにピルに対するイメージとピル使用への考えの関連を分析したところ、男性・女性いずれも強い有意差 ($p < 0.001$) が見られたが、男性ではこの二つの意識の一致が見られたのに対し、女性では必ずしも一致していない。この背景には、自分は何もしないで済んでしまうためピルの良い面しか見えていない男性の安易な考えと、副作用に対する不安や経済的負担、産婦人科での受診・処方といった実際にピルを服用する立場としての女性の慎重な考えによって生じた差異と考えられる。